

*** 今日の健康 (3月) ***

< 子宮頸癌 と 予防 (その1) >

治療する癌から予防する癌へ

<子宮頸癌についてかんたんに>

子宮頸癌(扁平上皮癌)は、子宮の出口にあたる子宮頸部にできる癌のことで、子宮内にできる子宮体癌とは異なります。原因は遺伝に関係なくほぼ100%がHPV(ヒトパピローマウイルス)というウイルスの感染によって起きるとされています。多くの場合、このウイルスは性交渉によって人から人へ感染するとされ、中でも発癌性のあるHPVには女性の約80%が一生涯に一度は感染していると推定されます。このため、性交渉の経験があるすべての女性が子宮頸癌になる可能性を持っているとされています。

子宮頸癌は近年、20代後半から30代後半の女性に多く、発症率が増加傾向にあります。現在では癌による死亡原因の第3位で、女性特有の癌の中では乳癌に次いで第2位。特に20代から30代の女性においては、発症するすべての癌の中で第1位となっています。

なお子宮体癌の大部分は40歳以降に発生し、39歳以下の子宮癌のほとんどは子宮頸癌で、39歳以下では子宮頸癌は乳癌の次に多い癌です。

<症 状>

初期の子宮頸癌はほとんど自覚症状がなく、進行すると不正出血が見られる場合もあります。生理の量が増える、生理で無い時の出血、性行為時の出血、普段と違うおりものが増える等がある場合は速やかに婦人科を受診しましょう。



<異形成の治療法>

異形成は程度に応じて軽度異形成、中等度異形成、高度異形成に分類され、上皮内癌も高度異形成と同様の取り扱いです。軽度異形成はHPVが自然消失すると、それに伴い異形成も自然治癒する可能性が高いため通常は治療を実施しません。中等度異形成の日本国内での取り扱いは一定しておらず、経過観察または治療を行います。治療法は病変部位を含め、子宮頸部の一部分を円錐状に切除する円錐切除術が一般的です。

<子宮頸癌の治療法>

子宮頸癌の進行期は軽度のものから順に0期、IA1期、IA2期、IB1期、IB2期、II期、III期、IV期に分類され、病期や年齢、合併症の有無など患者さんそれぞれの病状に応じて外科療法、放射線療法、抗癌剤による化学療法などが選択されます。

<子宮頸癌の最大の特徴>

予防接種で予防可能な癌であり、また定期的な子宮頸癌検診により子宮頸癌になる前の段階の病変(異形成)が発見可能なため、異形成の段階で早期発見、治療が可能で、癌の発症を未然に防ぐことができます。

次号は原因であるHPV(ヒトパピローマウイルス)とその予防についてです。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏

*** 今日の健康 (4月) ***

< 子宮頸癌 と 予防 (その2) >

治療する癌から予防する癌へ

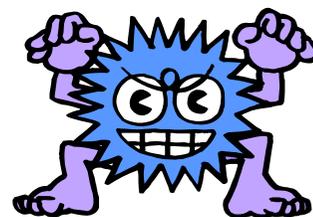
< HPV (ヒトパピローマウイルス) >

ドイツ人のウイルス学者であるハラド・ツアハウゼン氏は、1976年に「HPVが子宮頸癌の原因である」という仮説を発表しました。そして1983年に子宮頸癌腫瘍の中にHPV16型のDNAを発見しました。翌年には、HPV18型のDNAも同腫瘍中に発見し、この研究結果を元に2006年に子宮頸癌ワクチンが製造されました。これらの功績によりハウゼン氏は2008年のノーベル生理学・医学賞を受賞しています。

HPV (ヒトパピローマウイルス) は、パピローマウイルス科に属するウイルスの一種で、現在確認されているだけでも100種類以上あるとされています。この内、発癌性の高い15種類が子宮頸癌の原因とされています。(

HPV16, 18, 31, 33, 35, 39, 45, 51, 52, 56, 58, 59, 68, 73, 82, ときに26, 53, 66) 型です。

実際には、これらの発癌性HPVに感染しても90%以上の人は、2年以内には自己の免疫能により体内から自然に消失し、残りの10%の人ではHPVの感染が長期化(持続感染化)し、その一部で子宮頸部の細胞に異常(異形成)を生じ、さらに平均で10年以上の歳月の後、ごく一部(感染者の1%以下)が異形成から子宮頸癌に進行します。



< HPVから子宮頸癌へ進行する要因 >

生涯における性行為の相手の人数が多い、性行為の年齢が低い、喫煙している、経口避妊薬(ピル)の服用、妊娠回数が多い、他の性感染症に罹っている。等

< 子宮頸癌の予防 >

一次予防としてHPVに対するワクチン接種、二次予防として定期検診があります。

ワクチン接種

HPV感染予防ワクチンは6ヶ月の間に必ず3回の接種が必要です。途中妊娠、出産、授乳などがあって6ヶ月以内に3回の接種が困難で、6ヶ月以上間が開いても3回接種することにより免疫を獲得できるとされています。ワクチン接種スケジュールは必ず接種医師に相談しましょう。

検診

日本国内で実施されている子宮頸癌検診の検査法は細胞診とHPV検査です。いずれもWHOで子宮頸癌の検診検査として有効性が認められた検査法です。

子宮頸癌は発癌の過程が明確で、癌化する前の「前癌病変」期間が長いので、検診によりHPV感染から癌化前の異形成の段階で早期発見することが可能です。最低でも2年に1回は健診をしましょう。

< 注意事項 >

ワクチン接種をしても安心せずに子宮癌健診、婦人科健診は必ず行ってください。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏